

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### ■ ある顛末記

山岡洋一

#### 一 学生もすなる……

インターネットで「翻訳通信」の記事に酷似した論文を見つけた。学生もすなる何とかいうふものを、教授もしてみむとてするなりということなのだろうか。その顛末を報告する。

### ■ 翻訳概論

山岡洋一

#### 一 英文和訳についての覚書

英文和訳と翻訳には共通する部分と違う部分がある。どこがどう違うかを明確に認識しておかないと、知らず知らずのうちに、翻訳の実践と評価にあたって、英文和訳の影響を受けることになる。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 学生もすなる……

高血圧に不整脈、軽度のメタボに重度のニコチン中毒と、基礎疾患が4つもあるのだから、怒ってはいけなくて医者にいわれた。ストレスをなるべく減らしなさいともいわれた。命取りになりかねないというのだ。どこまで本気なのかは分からない。何しろ、我怒る、故に我ありといえるほど、いつも何かに立腹しているので、からかってやろうと思われたのかもしれない。それでも命にかかわるといわれては、無視するわけにいかない。だが、怒らないようにしていると、それはそれで問題も起こる。それこそ腹ふくるゝわざ、ストレスがたまる一方になりかねない。

昨年後半、どうやらインフルエンザにやられて、寝込むほどではないが、頭に負担がかかることは何もする気になれなかったとき、年末締め切りで書かなければいけない文章があり、その資料になるものがないかと、インターネットでいろいろと検索して時間をつぶしていた。そのときにでてきた文書のひとつをみて、目を疑った。自分が何年か前に「翻訳通信」に書いたのとじつによく似た文章があったからだ。

全文をプリントアウトして読んだところ、猛烈に腹が立ってきた。いけないいけない、怒ってはいけないのだ。冷静になっていくつかの点を確認した。まず、この論文は比較的最近に書かれていて、自分の文章の後に書かれたことがはっきりしている。つぎに、「翻訳通信」の該当する部分もプリントアウトして比較した。全体で12ページほどの論文のうち1ページ強、ほぼ10%が「翻訳通信」の記事ときわめてよく似ていることが分かった。そして、その記事のために作成した表が、そのままの形で掲載されていた。出典は書かれていない。参考文献がいくつかあげられていたが、そこにも「翻訳通信」はない。

つぎに著者について調べた。インターネットのお陰ですぐに分かった。某有名大学を卒業し、某有名大学大学院博士課程を満期退学の後、某有名大学助教授を経て、現在は同大学大学院教授だという。そこそこの実績と権威のある学者なのだろう。この論

文が勤務する大学の刊行物に収められていることも確認した。

こういう件は「無断引用」と呼ばれることが多い。じつに奇妙な言葉ではないだろうか。「引用」というのは、著作権法で万人に認められた権利だ。公表された著作物を引用する際に、原著者に断りを入れる必要はまったくない。そして「翻訳通信」は公表された著作物なのである。だが、引用は「公正な慣行」に合致し、「正当な範囲内」で行われなければならない。この条件を満たしていない場合には、「引用」とは認められない。だから、問題は無断かどうかではなく、引用かどうかなのである。今回の件は引用なのだろうか。

引用でないことは明らかだと思えた。まず、教授本人の文章との間に明確な区別がされていない。本人の文章だと思える形になっている。引用だとは書かれていないし、出典も明記されていない。参考文献にすらあげられていない。そのうえ、偶然の一致にしては似すぎているが、まったく同じではない。いくつかの追加や変更がある。追加のなかには明らかかな間違いや、疑問符が付く言葉がある。変更によって、趣旨が逆になっている。だから腹が立ったのだ。

もうひとつ、黙示的な引用とも呼ぶべきものがある。出典を明記するまでもないほど有名な言葉なら、クレジットなしで引用することがある。ただしこれが可能なのは、ごく短い言葉だけである。今回の件が黙示的な引用でないことも明らかだ。短くはないし、有名な言葉でもないからだ。

黙っていても怒りが募ってくる。どうするべきか。学者の世界というのは馴染みがないので、何人かの知り合いに意見を聞いてみることにした。刊行物の編集責任者に抗議するか、本人が所属する学会で問題にしてもらうようにすべきだという強硬な意見もあった。メール・アドレスが本人のサイトに明記されているので、メールで知らせればよいという穏当な助言もあった。結局、穏当な助言に従うことにした。

なぜかという、有名大学大学院教授にしてはあまりにお粗末だと思ったからだ。学生じゃあるまいしと思うと、実際の執筆者が本人ではなく、大学院生か助教なのではないかと思えてきた。もしそうなら、教授本人のみならず、若い研究者が将来を失うことになりかねない。腹が立つのは教授本人に対してなので、ここでリスクをおかすことはないと思えたのだ。

そこで12月初めに、控えめなメールで事実関係を問い合わせ、善処を求めることにした。1ページ強の本文と表について「翻訳通信」のサイトに掲載されている拙稿を参考にされたかどうか、事実関係をお教えください、参考にされたとすればクレジットがなく、参考文献にもあげられていないのは遺憾であり、わたしの側が写したわけではないことを示すためにも、参考文献に追加していただきたいという趣旨であった。

いまになって振り返ると、控えめすぎたようだ。教授からはすぐに返信があり、何度かやりとりがあった。どうやら大学院生や助教が書いたのではないようなので、その点では安心したのだが、とくに重要だとも思えない表について語るだけで、肝心の本文については触れようとしな。表は出典を示せば問題は終わりだが、本文はそうはいかないからなのかもしれない。また、資料として書いたもので、公開されることを忘れていたとも釈明しているので、本文はたいした問題ではないと考えたのかもしれない。いずれにせよ、表の出典を示し、参考文献に「翻訳通信」を追加するだけで決着をつけようという意向のようだった。

そこで、かなり厳しい警告を書くことにした。こういう問題にくわしい友人によれば、学会か学内で問題にされれば「完全にアウト」だとのことだと指摘し、しかるべき人に相談されるように勧めた。それでも相手の姿勢が変わらないようなので、同様の警告を再三繰り返すことになった。

だがそれでも変わらなかった。1月に入って、サイトの担当者と連絡が取れて修正が終わったという連絡がきた。案の定、表の出典を示し、参考文献に「翻訳通信」を追加しただけであった。

それにしても不思議な対応だ。当初の形であれば、元の文章を書いた本人以外の人が気づく可能性はき

わめて低かったはずだ。問題の論文は本人にとっては資料にすぎないということのようだが、それにしても、インターネットで読む人がいて、その人がつぎに参考文献を読む可能性だってある。その場合、本文がおかしいことにすぐに気づくはずだ。学会か学内で問題にされればどうなるだろうか。「完全にアウト」だというのは少し大げさだとしても、苦しい立場に追い込まれるのではないだろうか。参考文献に明示したことで、そうなる可能性が高まったと思えるのである。

今回、知り合いから受けた助言のひとつは、名誉毀損で訴えられる可能性があるので注意するようということであった。実際にそういう例もあるという。じつのところ、そうなれば面白いという気持ちもある。友人に弁護士がいる。検事も頭を下げる辣腕ぶりだという評判だ。訴えられれば、その腕をこの目で見る機会になるかもしれない。幸いというべきか、いまのところ裁判には縁がないから、そんな機会もなかった。

しかし、フリーの翻訳者にはそんな馬鹿げたことに時間を使うような余裕はない。だから、ここでも、本人の名前や論文のタイトルなどを知る手掛かりになるようなことは何も書いていない。

長年フリーの立場で仕事をしてきた別の友人がよくこう語っている。フリーの人間にとって、板子一枚下は地獄だと。ひとつ間違えれば、もうそれで終わりなのだ。学会で問題にされるまでもない。だからいつも緊張して仕事をしている。

国立の有名大学の教授ともなると、まるで違うようだ。自分の立場は安泰だと安心しきっているのだろう。だから、講演か何かのために資料を書く必要に迫られたとき、インターネットで見つけた文章をよく読みもせずに気楽に使う。どこかの馬の骨が書いた駄文だから、誰も読んでいないはずがないということなのだろうか。そう思うならそれも結構。医者助言だからからかいだかに従って、怒らないことにしよう。命を大切に、残された時間に納得できる仕事をするにしよう。板子一枚下は地獄の人間の心意気を示してやろう。

## 英文和訳についての覚書

翻訳が英文和訳とは違うことは、おそらくおぼろげながらも一般に理解されているとみられる。しかし、どこがどのように違うかはおそらく、あまり理解されていない。そのため、英文和訳についての見方が、翻訳を行うとき、翻訳を評価するときには知らず知らずのうちに影響を与えることになる。したがって、翻訳の教育と学習にあたっては、英文和訳と翻訳の違いを明確にしておくことが重要である。

まず、指摘しておくべきことは、翻訳をもっとも広い意味でとらえたとき、英文和訳がその一部であることだ。外国語教育の柱としてはるか昔から使われてきた方法に訳読法がある。外国語の文章を翻訳することによって、外国語の構文や語句を学ぶのが訳読法である。英文和訳はその一種なのであり、したがって、翻訳教育の一種である。英文和訳を学べば、英文の訳し方を学べる。ただし、学べるのは、特殊な目的に合わせて最適化された訳し方である。

では、英文和訳はどのような目的に合わせて最適化されているのか。第一は、翻訳調の翻訳者を育てるという目的である。英文和訳の方法が確立したのは、欧米の進んだ文化を取り入れるための手段として、翻訳調の翻訳が使われていた時期にあたる。旧制の中学から大学までの学校教育は、翻訳調で訳せる翻訳者の育成を目標のひとつにしていたので、これは当然の目的であった。英文和訳の方法が翻訳調にきわめてよく似ているのは偶然ではない。意識的な努力の結果であったのだ。

第二は、入学試験を中心とする試験で良い成績がとれるようにするという目的である。試験にあたっては、辞書や文法書などの各種資料の持ち込みができないので、英文和訳では資料を使わずに訳せるようにしておかなければならない。さらに、試験は時間的な制約が厳しいので、かなりの量の英文を短時間に訳せるようにしておかなければならない。このため、たとえば大量の単語や連語の訳語、構文の訳し方を決めておき、すべてを暗記しておく。また、原文の意味を考えて訳す方法では時間がかかるため、意味を考えることなく、決められた訳語、決められた訳し方を使って機械的に訳す方法を使う。

このような目的に合わせて最適化された英文和訳は、広義の翻訳の一種であると同時に、きわめて特殊な訳し方を使うという特徴がある。したがって、いまの時代に目指すべき翻訳（いうならば狭義の翻

訳）とは大きくみればかなりの共通点があるとともに、細かくみていけばかなりの違いがある。共通点があって違いのあるものは混同されやすい。そして、ほとんどの人にとって、英文和訳は英文の訳し方として正式な教育を受けた唯一の方法なのである。このため、狭義の翻訳の実践か評価を行う際に、そうとは意識しないまま、英文和訳の考え方から影響を受けるのは、ほとんど避けがたいことだといえる。影響を受けないようにするには、英文和訳と翻訳の違いを明確に意識しておくしかない。

そこで、英文和訳と翻訳にどのような違いがあるかをみていこう。

第一に、目的が違う。英文和訳は英文の読解力を試験の採点者に示し、高い点数を獲得することが唯一の目的である。これに対して翻訳では、原文の内容を忠実に読者に伝えることが目的である。

第二に、過程が違う。英文和訳では、原文を読み、訳していく。その際に、語句や構文を決められた訳し方で訳していくことが大切である。翻訳では、原文を読み、調べ、理解し、理解した結果を母語で書いていく。英文和訳では訳し、翻訳では調べて書く。

第三に、フィードバックの仕組みが違う。英文和訳では点数と正解が示されるので、どこをどう間違えたのかを検討できる。翻訳では訳文を見なおす際に、意味が通じるかどうかを検討する。意味が分からない文章になっている場合には、原文の読解か内容の理解、母語の文章のいずれかが不適切である可能性が高い。そこで、どこがどのように不適切かを検討する。英文和訳では正解がカギになるのに対して、翻訳では意味が手掛かりになる。

以上のような違いから、注意すべき点がいくつもでてくる。たとえば、原文を「忠実に」訳すというとき、たいていは原文の語句や構文を決められた通りに訳すことだと解釈される。こうしたスタイルでは実際には、原文に忠実にはならない。英文和訳で教えられた訳し方に忠実に従うだけになる。こうした問題については、あらためて論じることにはしたい。